

# 第64回 書道同文展

会期 六月二十一日～二十六日  
会場 上野 東京都美術館

新生、東京都美術館、第六十四回書道同文展は、三年ぶりに古巣に帰っての開催となりました。朝九時半の開門。リニューアルした美術館は、先ず上下のエスカレーターと一台のエレベーターが目飛び込み、長い階段では入館が難しかったであろう方々にも心温かく、地下の入口へと誘ってくれました。

さて、期待に胸おどらせ第一室へ。靴音を消した絨毯は観覧者の膝腰にも優しくなっている様でした。鈴木静村会長を始めとする大先生方の作品には感動。特に静村先生の「中川一政講演録より」の長文は、御体調を崩されていた事を存じ上げていただけに、その揺るぎ無い書美に感慨無量。池田群竹副



会長も然り、「山の歌」からは優美かつ強い精神力をお示しになられました。客員に就任なされた高橋香樹先生は初出品。二百年の古墨に煤を混ぜたという薄墨と、楷書のみ外す篆隸行草体での「折楊柳歌」は、余白の妙に此の為に刻したという落款で異彩を醸し出し、僭越ながら新風を吹き込まれた喜びを感じずにはいられませんでした。小作品に甘んじた二年間の解放からか、会員の方々はバラエティに富み見応えある大作揃い。そして準会員・会友・一般へと進み十一室まで。意気込みに溢れた力作達を前に感銘を受ける事も度々。

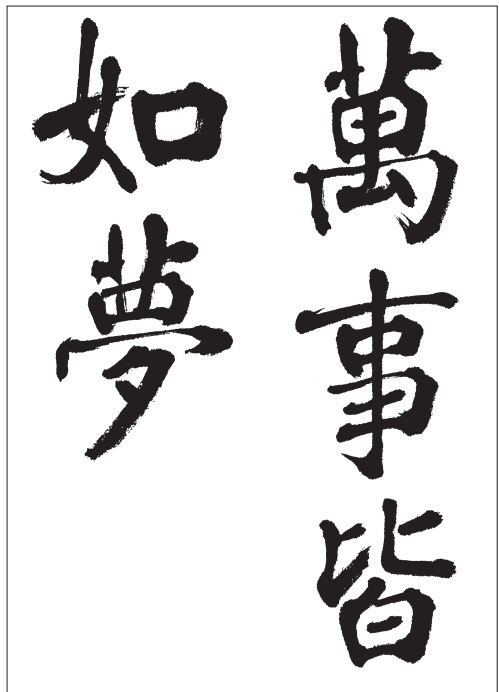


書展会からの受賞者は今年も多数、学びの場から発表の場への挑戦は、着実に飛躍へと繋がっていく事でしょう。新しくなった美術館と同文会は、貴方の出品を待っています！

(手代木春游)

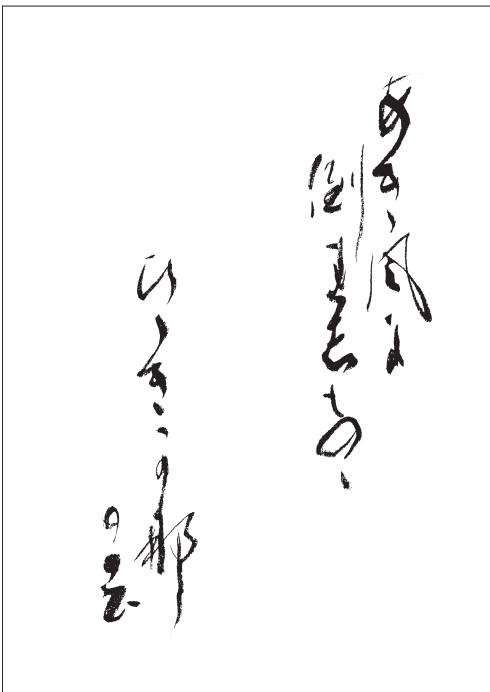
## 半紙課題(予告) (十月二十二日締切)

平岡華雪先生書 萬事皆夢の如し。(菅原道真自詠の一節)



訳：萬事が皆夢のようである。

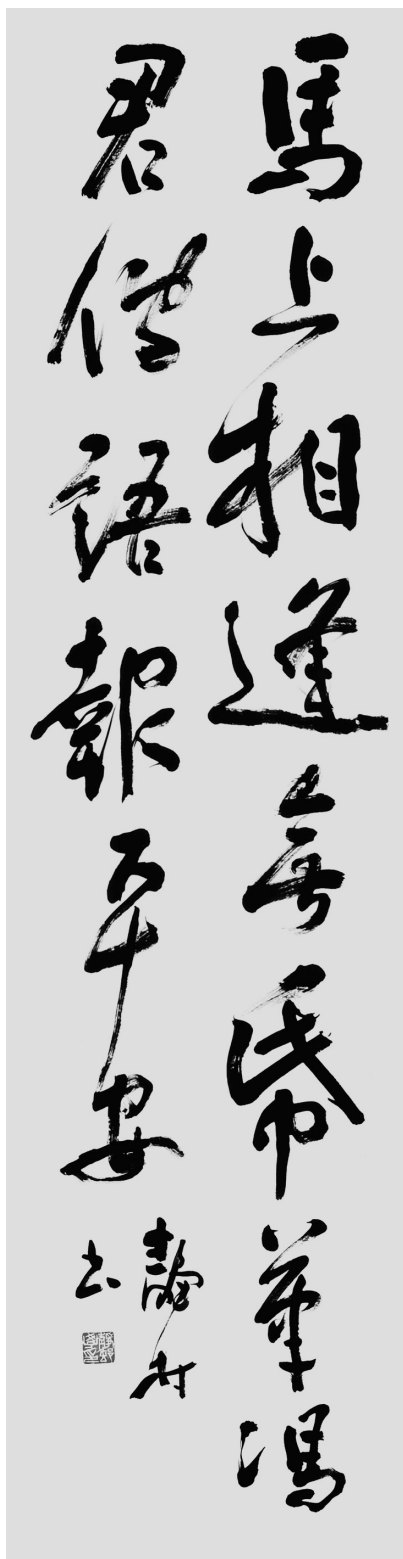
平岡華雪先生書 秋風に倒れしものゝひびきかな(泊月)



A

鈴木静村書

馬上相逢無紙筆 馮君傳語報平安 (岑參)  
馬上相逢ばしやういて紙筆無し、君に馮よって伝語でんごして平安を報せん



B

高橋香樹先生書

馬 一画目と二、四画を離すと字面が明るい。上 筆順は各自自在に。相 偏を大きく王鐸調。逢 之繞で字幅を。無 小さくも強く。紙 墨継ぎ、この字体古典に多い。筆 縦長く草体。馮 馬の筆順は冒頭馬字とは違えて。左行 君、伝、語 渴筆の表出で、線が単調にならぬよう。報 墨継ぎ、旁筆順注意。平 末画は倒れ過ぎ、みなさんは正常に。安 一、二、三画目で締めを。落款、一、二行書き共に可。



今回は、線の強弱・潤渾を意識した作としました。筆に墨がなくなつて出る渴筆は、線が荒くなり魅力に乏しいものです。キメの細かい渴筆は、含墨されている状態での表出でなければなりません。墨継ぎは「紙・語」。左右の行の出入りも意を用いて書きたい。筆は四号長鋒羊毫使用。訳：せっかく出逢つたが馬上のこととて紙も筆もない。しかしこれから都に帰るのであれば、どうか君の口から、私の平安を伝えてくれたまえ。

予告 (十月二十二日締切)

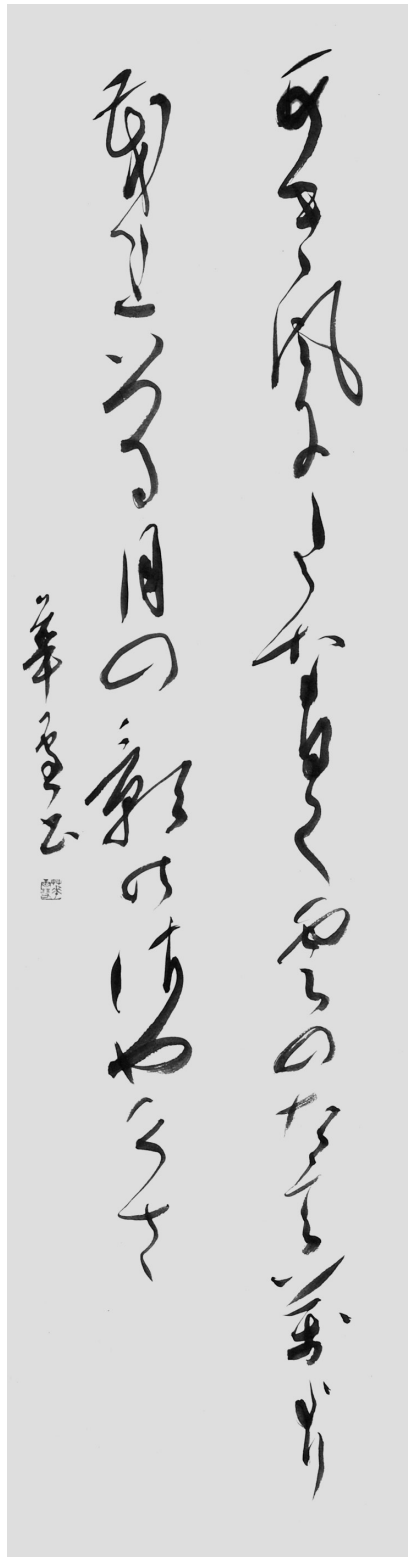
滅却心頭火自涼 (杜荀鶴) 一行書

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

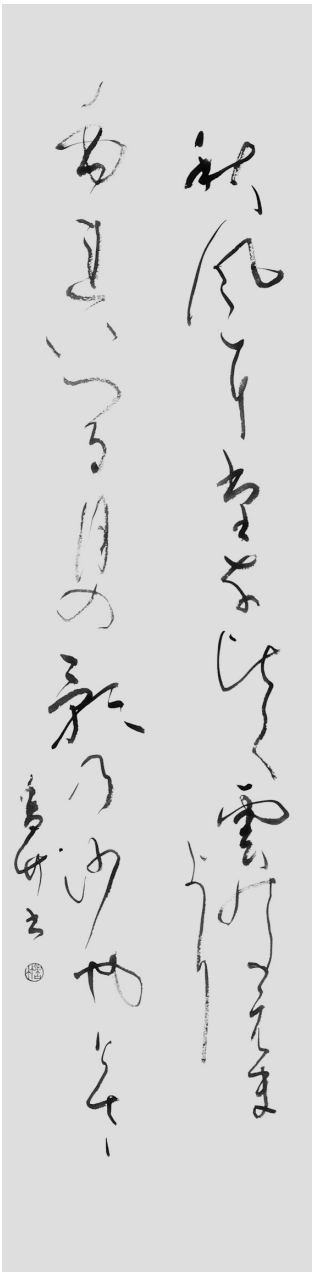
秋風にたなびく雲の絶え間よりまれいづる月のかけのさやけさ (新古今和歌集 左京大夫顕輔)  
あき風<sup>に</sup>多<sup>た</sup>なび<sup>ひ</sup>く雲<sup>の</sup>のたえまよりまれいづる月の影<sup>の</sup>能<sup>の</sup>佐<sup>の</sup>やけさ



B

青柳香竹先生書

秋風<sup>に</sup>耳<sup>に</sup>堂<sup>に</sup>奈<sup>に</sup>比<sup>に</sup>く雲<sup>の</sup>能<sup>の</sup>多<sup>の</sup>えまより毛<sup>も</sup>連<sup>れ</sup>いつる月の影<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>沙<sup>の</sup>やけさ



訳―秋風に吹かれて、たなびいている雲の切れ目から、洩れて射出する月の光の何と清らかなことよ。

学び方

一行目を低く「堂奈比く」で幅をとり、「能多えま」の四文字を連綿し、筆先の細い線でしまりを考え、「より」を軽く添えました。二行目は大きく渴筆でゆっくりとした線、「影」で墨を入れて、「沙やけさ」で歌意を気持ちに込め、間隔をと

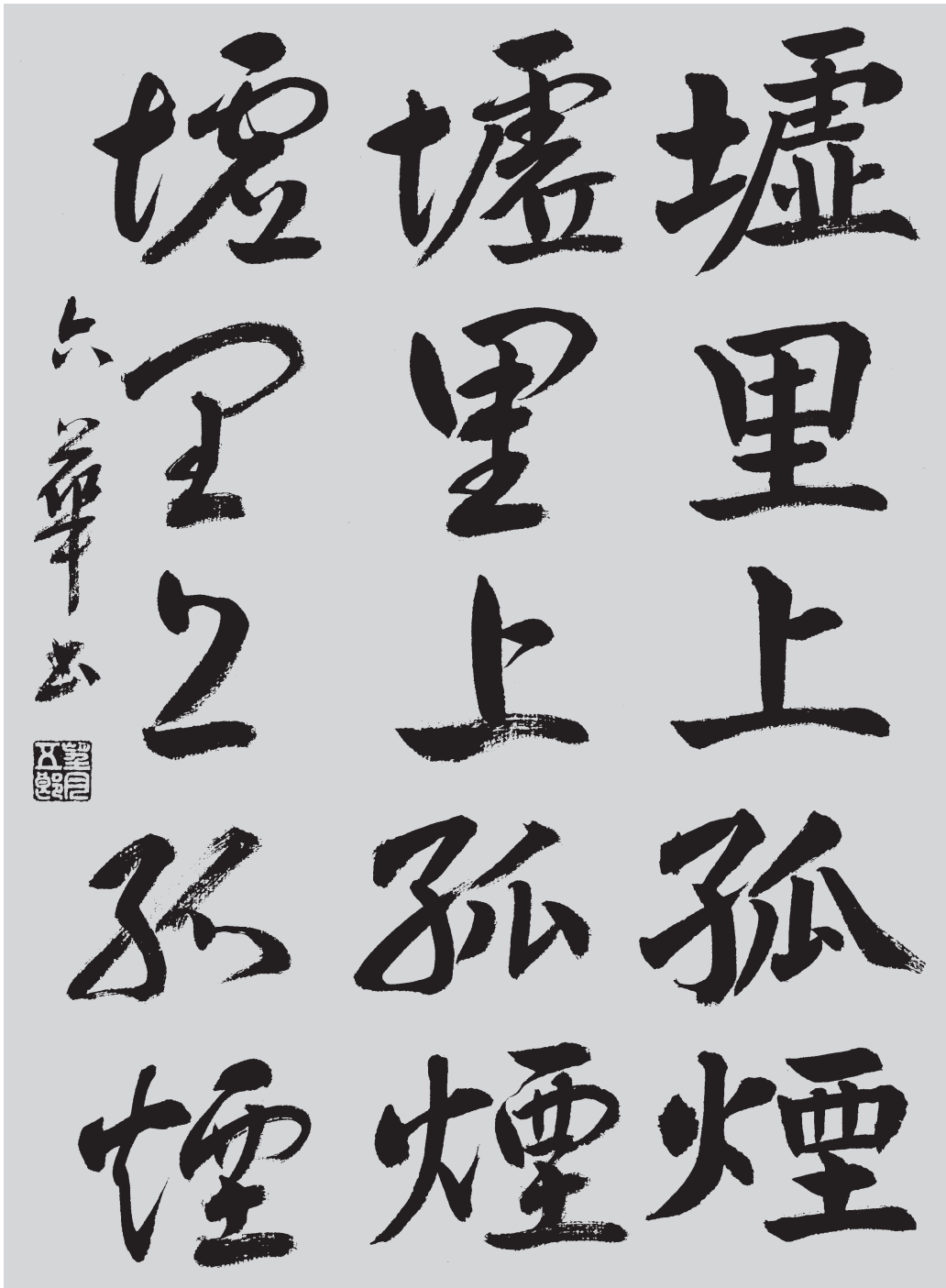
予告 (十月二十二日締切) ゆく雲の影かと思しはすき原をりをり風のわたるなりけり (入江為守)

顕輔―六条藤家の祖顯季の三男、正三位左京大夫。第六代勅撰集、詞花集撰者。新古今和歌集―総数一九七九首。第八番目の勅撰和歌集。一二二六年、家長により清書され完成した。西行九四、慈円九二、良経七九。新古今歌風、新古今調といわれるものは、感覚的な象徴美であるとされる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

望月六華先生書

墟里上孤煙(王維)  
きよりのこえんのぼ  
墟里孤煙に上る。

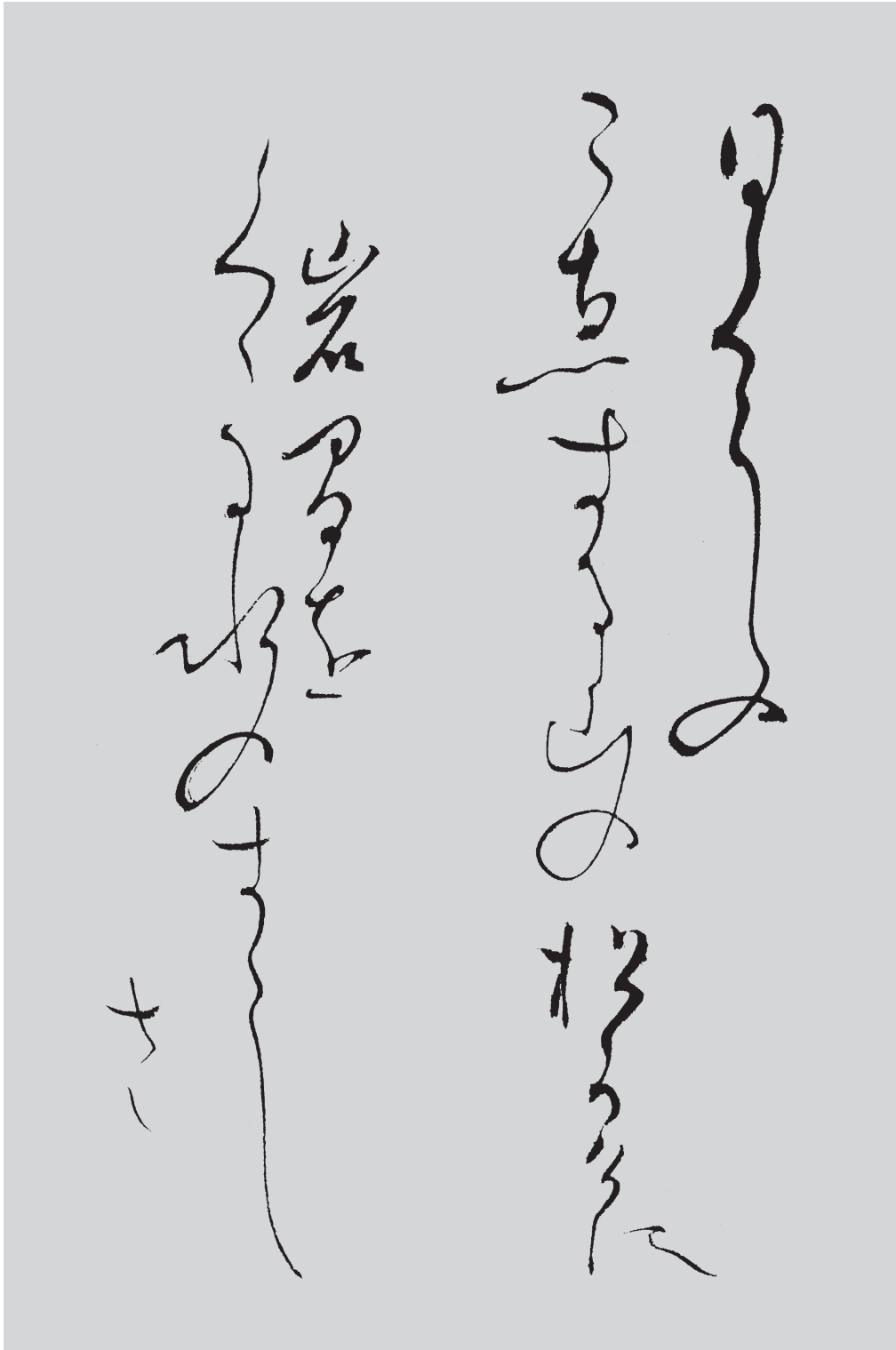


訳：秋の村里から、さびしく煙がたちのぼっている。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

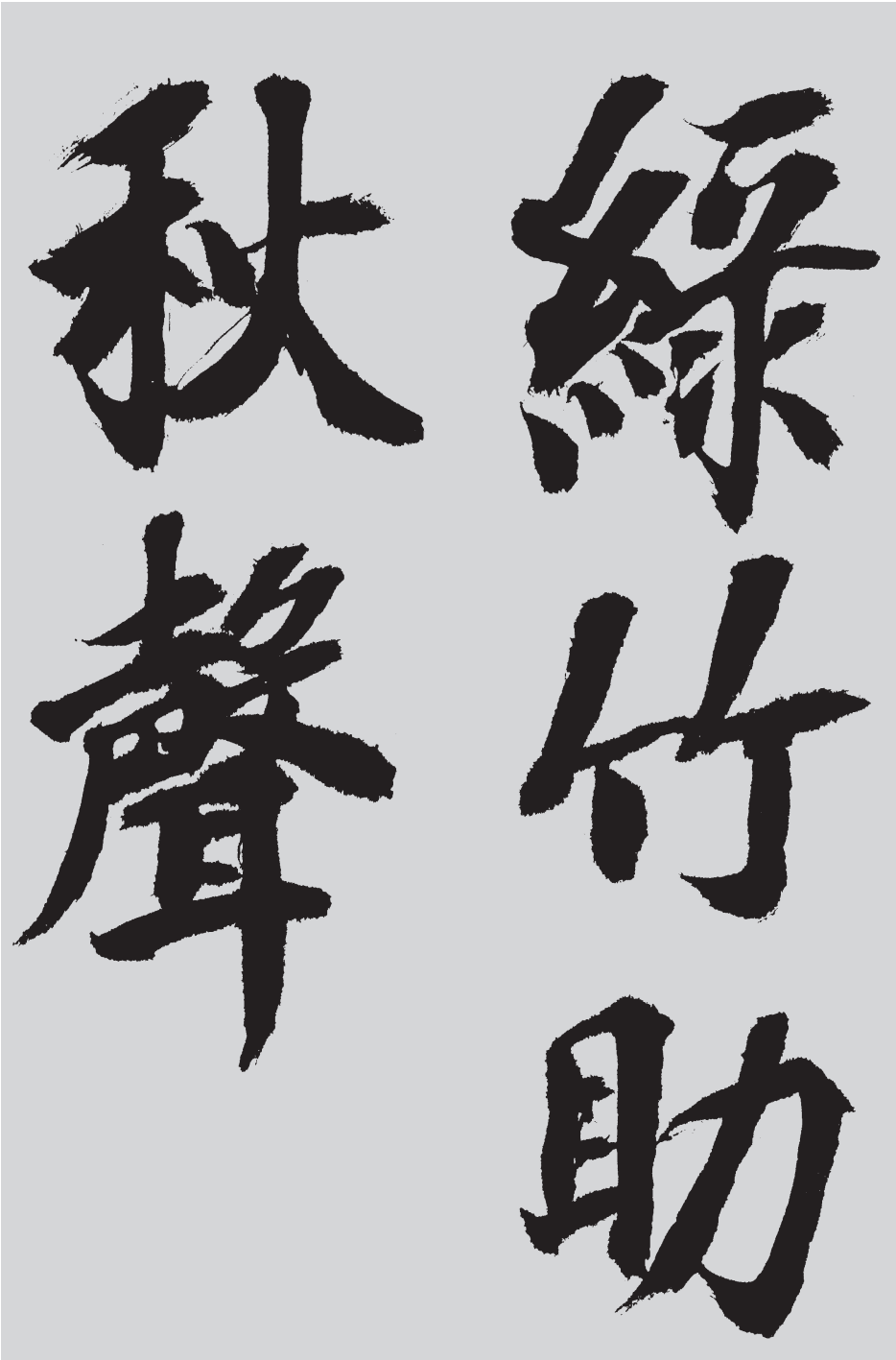
ひぐらしの声する山の松かげに岩間をくぐる水のすずしさ



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

緑竹秋声を助く(李白)  
訳：緑の竹が秋風の音をたすけているようだ。



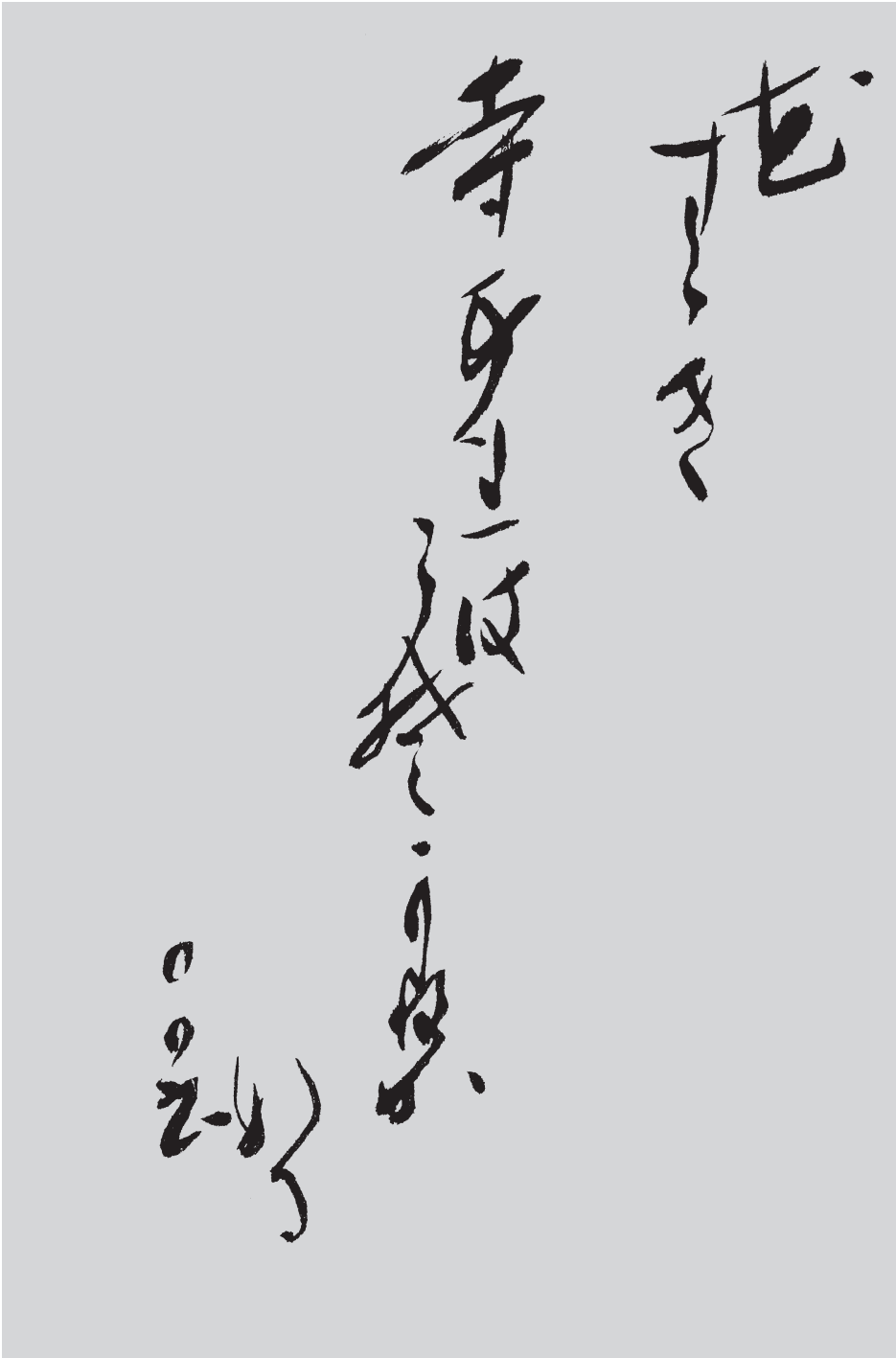
〔基本用筆の一つ〕

「緑・竹・秋」の第一画、頭部の入筆(打ち込み)は逆筆で強く入り、バネを利かせてはね返します。この用筆が決められると画は活きる。「竹」二画目と四画目は上を長く出す。「秋」の「火」の三画目はまっすぐ下へ。「聲」分間の空きに注意。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

花芒寺あればこそ鉦が鳴る(来山)  
花すゝき寺あ連はこ楚可ねか那る

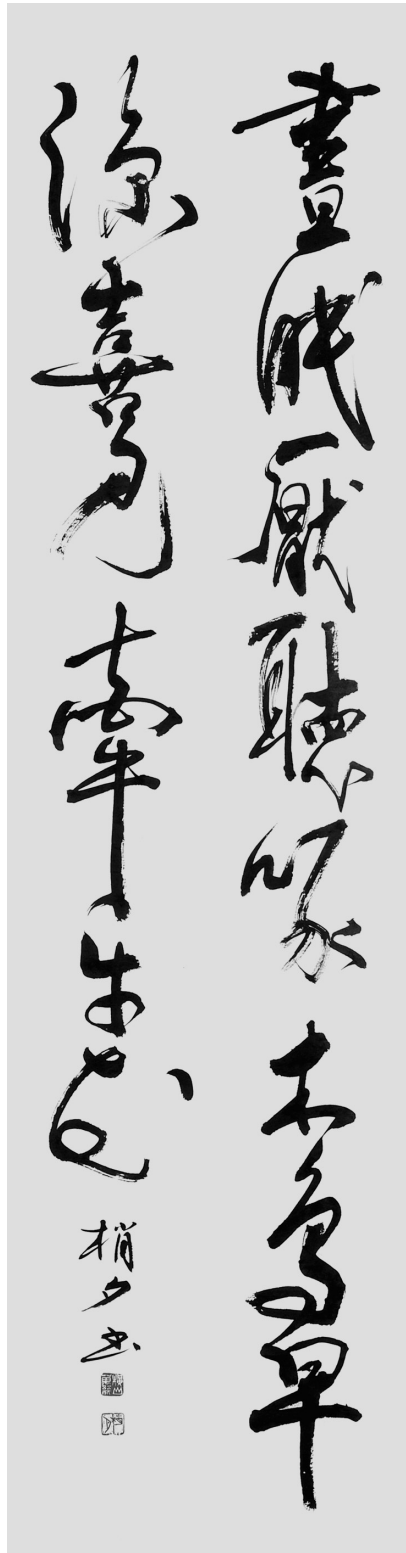


〈要留意の用筆〉  
 「花すゝき」「可ねか那る」踊り字と「可」が入った語句の場合、馴れてくると気にはならないものゝ、初歩段階ではこの抑揚のリズム用筆はスムーズにはいかないものです。これも連綿のポイントの一つなのですが…。  
 連… (diagram) 楚… (diagram) 那… (diagram)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

横山梢夕先生書

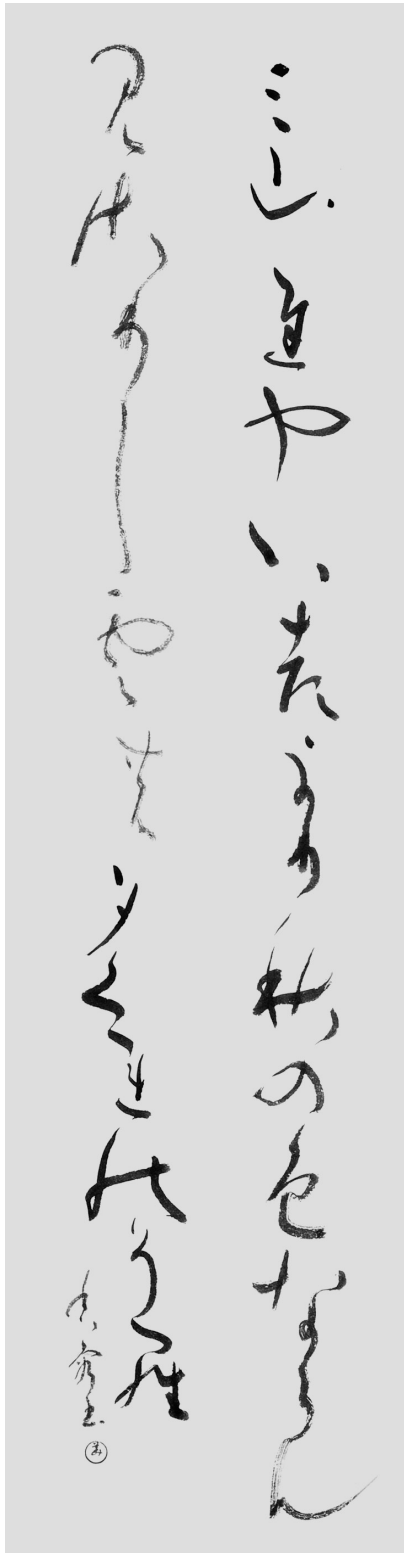
晝眠厭聽啄木鳥 早涼喜見牽牛花(馬臻)  
晝眠厭聽啄木鳥、早涼喜見牽牛花。



訳：午睡の邪魔になるからこつこつと音させる啄木鳥は好まぬが早い涼気のおとずれる朝顔の花を見るのは嬉しい。

川上香蓉先生書

み山路やいつより秋の色ならん見ざりし雲の夕暮のそら(新古今和歌集 慈円)  
三山選やい都よ利秋の色ならん見佐利し雲農夕久連能曾羅



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



星野春陽先生書

霞天數點鳥 風柳一枝蟬（曹有光）  
霞天數點の鳥、風柳一枝の蟬。

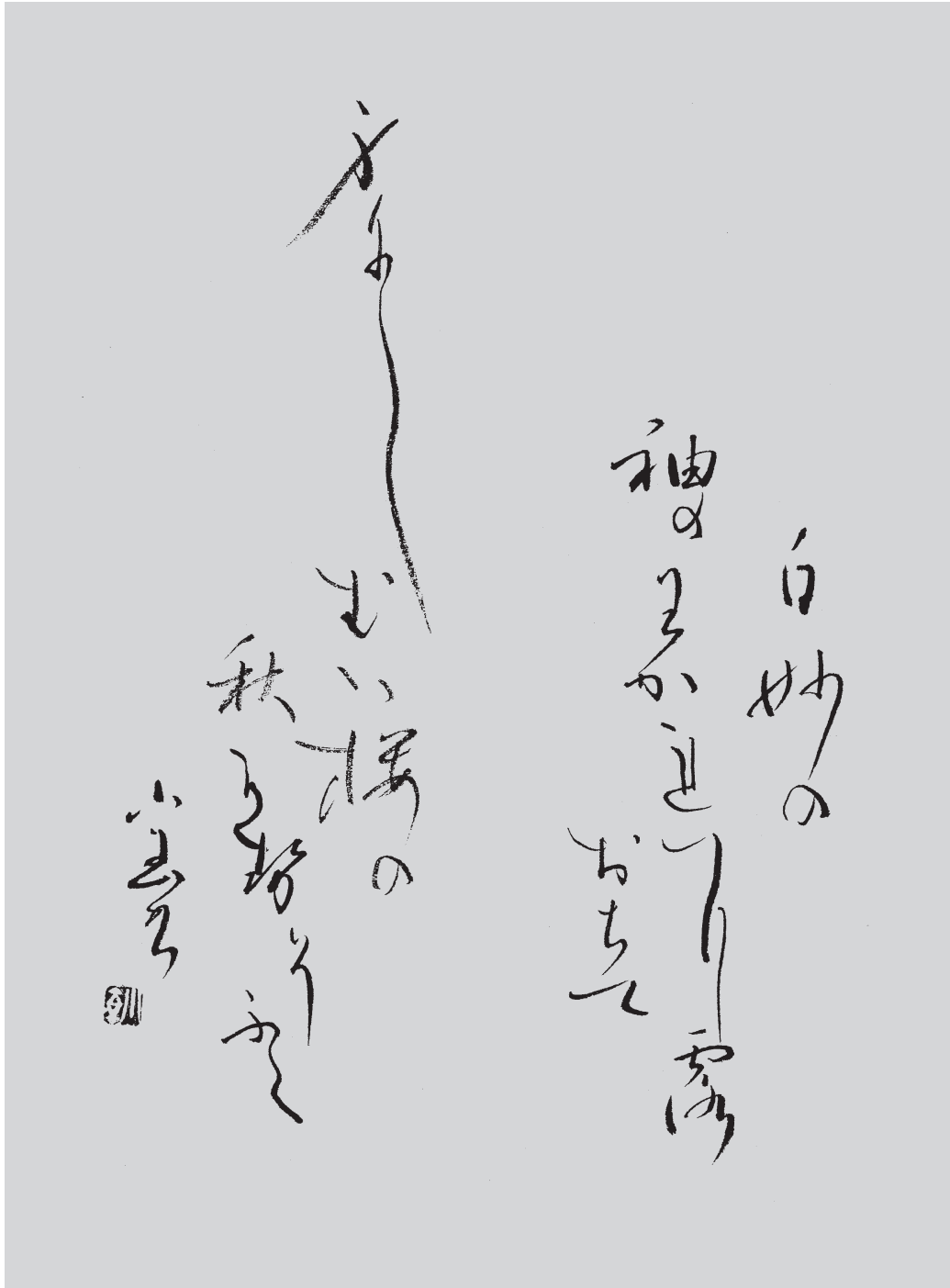


訳：夕やけの空には二、三羽の鴉が点々と飛び、風吹く柳にはその一枝に蟬が鳴いている。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高山小玉先生書

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく（新古今和歌集 藤原定家）  
白妙の袖の玉か連耳露おちて身尔しむい様の秋可勢曾ふ久



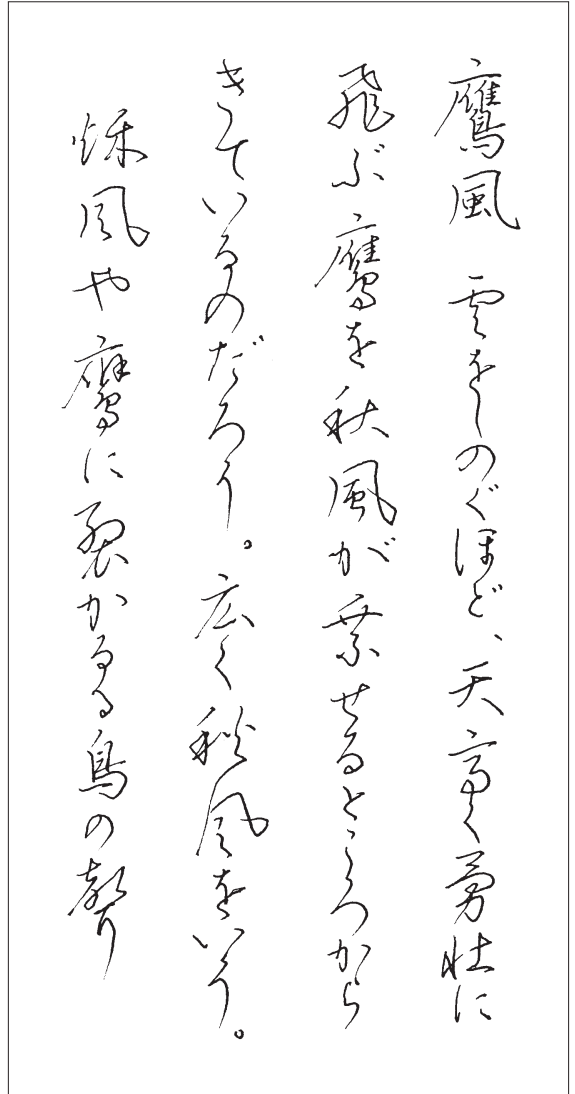
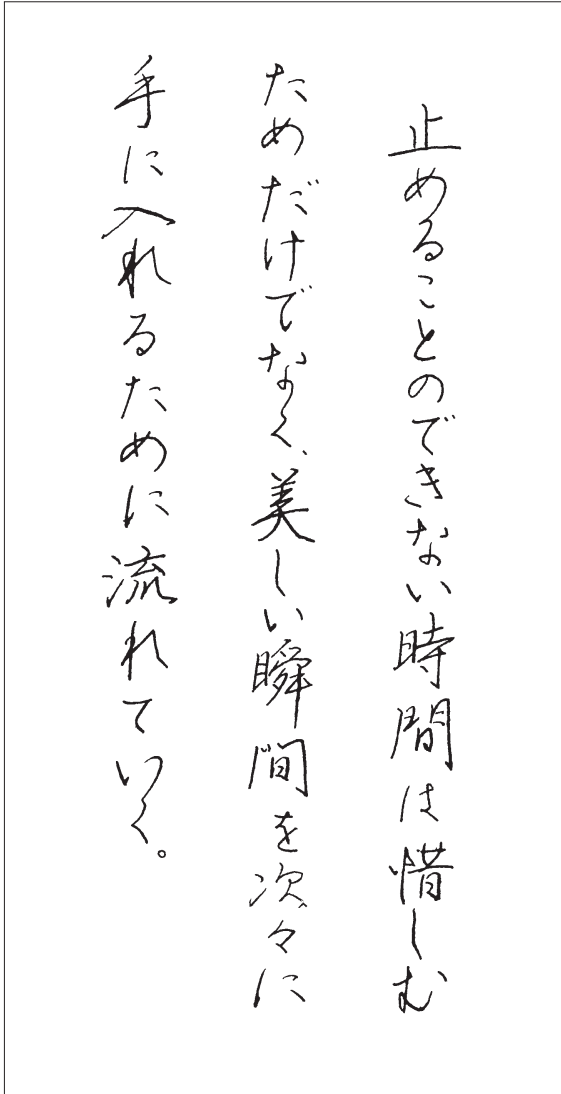
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

湯澤春翠先生書

路川千曄先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

鷹風 雲をしのぐほど、天高く勇壮に飛ぶ鷹が乗せるところからきておののろ。広く秋風をいう。

秋風や鷹に裂かるる鳥の聲

「風の名前」小学館 加藤暁台

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (4) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと。)
- (5) 課題1 六〇〇円
- (6) 課題2 三〇〇円

課題1 路川千曄先生 二〇七〇〇三

東大和市向原五ノ一〇九一ノ四

湯澤春翠先生 三三三二〇二六

前橋市城東町一―二九一五

課題2 (初段階以下)

止めることのできない時間は惜しむためだけでなく、美しい瞬間を次々に手に入れるために流れていく。

「黒いあげは」よしもとばなな